

解説 25 他者を理解する

【課題のねらい】

私たちは日常他者と接してその人を理解するというを行っていますが、その理解がいつも正しいわけはありません。ここでは、他者を理解することに注目してもらい、その難しさを知り、さらに心理学における他者理解の方法を探ってもらうことを目的としています。

【解説】

課題（1）については、こうあらねばならないというはっきりとした答えはありません。自分自身に問いかけ、自分は何をどころがけているか確かめてもらえれば良いのです。第一印象に頼らないことに加え、いろいろな場面で相手のことを観察する、その人らしさがわかるような質問を試みる、その人ともっとも親密な人にその人のことを尋ねてみるなどいろいろなことが浮かんできたのではないのでしょうか。

他者を理解するときに、自分自身のあり方、つまりこれまで自分が体験してきたことや自分の性格などが、大いに関わってきます。課題（2）の医学部学生の事例は、父親が手足の麻痺を起こしたという自分自身の個人的な体験が、他者を理解することに大いに関わっていることを示しています。また、人を当てにしすぎる人にとっては、他者が思いやりに欠ける人に思えてしまうことが多いでしょう。これは、人を当てにしすぎるという自分自身の性格が他者理解を不正確にしているのです。これまで自分が体験してきたことや自分の性格などが他者理解を不正確にしてしまうことも多くありますので、私たちはそのことを自覚し、自己理解を深めておく必要があります。

課題（3）は、人の心理や性格などを理解するのにどのような方法があるかを、調べてもらう課題です。これには、観察法、面接法、テスト法などがあります。それらの大まかな特徴を以下に記します。

観察法は、あらゆる科学において用いられる方法で、観察対象に制限を与えず、自然なありのままを把握するという意味合いが強いです。しかし、観察法によってとらえられるものは、外部に現れた行動であって、人間の心の内部ではないのであり、観察したことについて解釈が過剰にならないようにする必要があります。

面接法は、会話に基づく方法で、理解したい相手に直接会って会話するやり方もありますし、その人のことをよく知っている人と会話するやり方もあります。予め決められたやり方で決められた質問をしていく面接では、得られた情報の客観性は高いですが、回答も紋切り型になり易くなります。

話題の内容や方向を制限せずかなり自由に話を進めていく面接では、得られた情報の客観性は高いといえませんが、面接者が予想していなかった情報を得ることも多くなります。なお、面接法では、言語的情報を理解することも重要ですが、姿勢、表情、声の調子など非言語的に伝わってくる情報を理解することも重要になります。さらに、面接者が課題（2）で取り上げたような自分自身の体験や性格に目を向けることも重要で、そのことが相手の理解を深めることに結びつくこともあります。

テスト法は、統制されたテスト状況のもとで人を観察する方法で、質問紙法、投映法、作業検査法があります。質問紙法は、性格に関する質問項目を多数用意し、質問項目が当てはまるか否かを自分で評定してもらう方法です。この方法は、実施が簡単で被検査者が自分でも自覚している自己像のような側面をとらえることができます。

投映法は、多義的な刺激を提示してそれに対する自由な回答を求めるという方法で、とくに臨時的な援助の

場で幅広く用いられています。投映法は、実施や結果の解釈がむずかしい場合がありますが、本人が意識できていない欲求や動機のような側面をとらえることができるものもあります。

作業検査法は、作業課題を与えて、作業の量や質、経過からその人を理解しようとする方法です。この方法は、その目的を被検査者に知られないで済むという長所がありますが、性格のごく限られた部分しか知ることができません。